

千葉 裕太

はじめに

琥珀は植物性有機原石の一種である。琥珀と人類との関係は古く旧石器時代まで遡り、例えば日本では二万年前のものとされる琥珀玉が発見されている(白石 2002: 118-120)。装飾品のほかにも、薬、護符、香など、人類によって幅広い用途に使用されてきた。柔らかい琥珀は利器には適さないが、煙や香りを放つ性質などは、儀礼において重宝される。ゆえに、各地の世界観の中で象徴性が見いだされ、特異に利用されることが他の石よりも多い。そのため琥珀の利用法には、人類が石の何に注目して、どのように価値を見出してきたかが表れている。石と人の関わりの文化史を知るうえで、非常に有用な研究対象といえる。

世界ではバルト海周辺を筆頭に、ドミニカ共和国、日本、メキシコが有数の産地である。新大陸は旧大陸との「出会い」まで金属器を用いなかったため、人と石との関係が濃密に発展していた。また、旧大陸に広範に広がるアンバールートとも関係を持たないことから、旧大陸と隔離して特異性を見出せる可能性があるし、反対に植民地期以降の旧大陸文化の流入を探ることもできる。中でもメキシコは、考古資料、歴史資料が豊富にあり、現在でも採掘が行われ、琥珀との関わりが密な地域である。

本論文は、2014年4月からの資料分析、2015年4月及び2016年2月~3月に実施した現地調査に基づく。先スペイン期、植民地期、近代については先行研究の精査、考古学調査報告書、歴史資料分析から、現代については採掘場における視察と作業参加、産地における聞取り調査、琥珀製品販売の観察によ

る。調査地域はメキシコ・チアパス州シモホベル・デ・アジェンデ周辺と同州トトラパである。本論ではメキシコの琥珀利用を通時的に示すことで、同地における琥珀の物質文化史として論ずる。その全体から見えてくる先行研究の問題点や新たに適用しうる分析方法を提示し、今後の琥珀研究におけるテーマや課題を指摘する。

第一章 メキシコの琥珀

1.1. 琥珀の生成・組成・色

メキシコの琥珀は2500万~4000万年前に繁茂していたヒメナエア属の樹液を起源とする。植物起源であることから、黒玉などと同様、有機原石に属する。組成は産地により異なり、チアパス産琥珀の組成は表1のとおりである。

| 化学組成 | C10H16O |
|-------|---------------|
| 比重 | 1.05-1.09g/cm |
| モース硬度 | 2-2.5 |
| 軟化点 | 150°C |
| 溶融点 | 250-300°C |
| 熱分解温度 | 479°C |
| 屈折率 | 1.539-1.545 |
| 割れ口 | 貝状 |

表1 琥珀の組成

(リリア・ミハンゴ琥珀博物館資料を基に筆者作成)

琥珀は主に黄~赤色のバリエーションを持つ。琥珀の色は、樹液が地中を移動する間に受けた酸素結合や、圧力、温度の影響、樹液が含む成分の違い、沈殿場所周辺の鉱物環境、密度、細度、亀裂の量、形状、内含する有機物の量に影響を受ける。このような色の多様な決定要因より、同じ岩層から採石した琥珀でも全く異なる色を示す場合もあるため、肉眼での色彩分析からは産地を同定できない。

何色に価値が見いだされるかは、時代や文化により異なる。例えば日本では 黄色く透明な琥珀は「金琥珀」と呼ばれ最も上質のものとされていた(田 村 1999)。これは、「琥珀」の語の起源である中国において、琥珀は虎の精気が化石化したものであると考えられていたことによる。メキシコでは、植民地期初期の記録から、赤みを帯びた黄色琥珀に価値があったと考えられる。現在も赤色琥珀は黄色琥珀より希少性があり、より高値で取引されている。一般に透明度が高いほど琥珀の価値は高い。しかし、バルト海で産出する不透明な乳白色の琥珀や、ドミニカ共和国で主に産出し太陽光程度の紫外線でも青色を呈すブルー・アンバーは、その希少性から価値が高い。同様の琥珀はメキシコでもわずかに産出するが、透明でなくてもその希少性から高値で取引される。かつては色の象徴性が重要視されていたが、現在は石の価値基準が希少性へと変化したことが琥珀からわかる。

1.2. 性質

様々な琥珀の性質は、各言語での呼称の由来や、各文化での象徴的価値の要因、琥珀利用の多様性につながっている。

帯電性…琥珀は摩擦により静電気を帯びる。

絶縁性…電気を通さない。

燃焼性…火を付けると燃える。

発煙性…高温溶融時・燃焼時に、白色の煙を発生させる。

樹脂香…高温溶融時・燃焼時に、独特の樹脂香を発する。

脆弱性…硬度が柔らかく、加工しやすい。

浮遊性…比重が軽く、濃い塩水に浮く。川の水流に流され、海水に漂う。スペイン語 "ámbar〈アンバル〉"はアラビア語の"anbar〈アンバール〉"を語源とする。「海に漂うもの」を意味する"anbar"は琥珀の浮遊性に基づくことがわかる¹⁾。メキシコ先住民言語の一つであるナワトル語では「アポソナリ(apozonalli)」と呼ばれ「水の泡」を意味し、浮遊性に基づく。チアパス州の産地周辺先住民言語ツォツィル語では「パウチ(pauch)」、「パブチ(Pabuch)」、「パウチル(pauchil)」などと呼ばれている。1550年ごろドミニコ会士ドミンゴ・デ・アラ修道士により編纂された『コパナバストラ命ツェルダル語彙集』には、以下の記述がある。

「—— Pauchil, Pauch "琥珀。鼻につける(場合の)石:pauchil;唇の(場合の) 石, hubti"」(Ara 1986: 84v)²⁾

"hubti" は現在では使われないが、"pauchil"、"hubti" ともに宝石としての価値が見出されていたことがわかる。

1.3. 産地

チアパス州における琥珀の主な産地は、1)シモホベル、2)トトラパ、3)イスタパーソヤロの3つの地域に分けられる(図1)³⁾。また具体的な場所は記されていないが、サン・クリストバル・デ・ラス・カサス市(以下サン・クリストバル)周辺やオストゥアカンなどでも琥珀が産出すると報告されている(Böse 1905, De la Peña 1951)。本稿では現在も採掘が行われている1)、2)地域を中心に取り扱う。

シモホベル

シモホベル・デ・アジェンデは標高約660mに位置する、人口約4万人、面積447平方キロメートルの鉱山都市(ムニシピオ⁴⁾)である⁵⁾。1970年代後半に琥珀の採掘業が盛んになると、採掘、仲買、手工芸品製作・販売など、琥珀

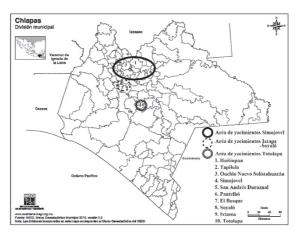


図 1 琥珀産地

(INEGI Marco geoestadístico municipal 2010を基に筆者作成)

と関わる生業を持つ人口が 増大した。一般に「琥珀の産 地シモホベル」⁶⁾ と呼ばれる のは、シモホベル・デ・ア ジェンデを中心に、周辺のム ニシピオ⁷⁾の採掘地を含む。

トトラパ

トトラパは標高約620mに 位置する。人口約6300人、 面積186平方キロメートルの ムニシピオである⁸⁾。1629年 までにバスケス・デ・エス ピノサが琥珀産地として記 述していたが (Vázquez de Espinosa 1948)⁹⁾、詳細な位

| ÁMBAR PREHISPÁNICO EN MESOAMÉRICA | | | | | | | | |
|-----------------------------------|------|-----------------------------|-------------------------------------|--|--|--|--|--|
| PERIODO | NÚM. | ZONA ARQUEOLÓGICA | EVIDENCIA | | | | | |
| Preclásico | 1 | Totolapa | Ocupación olmeca/cercanía a la mina | | | | | |
| | 2 | La Venta | 1 arele | | | | | |
| | 3 | Chiapa de Corzo | 7 piezas de joyería | | | | | |
| | 4 | San Isidro | 2 orejeras | | | | | |
| Clásico | 5 | Mirador | a cuentas grandes | | | | | |
| | 6 | Guajilar | ro piezas de joyería | | | | | |
| | 7 | Izapa | ı anillo | | | | | |
| | 8 | Monte Albán | i arete de jade | | | | | |
| | 9 | Palenque | i centro de orejera | | | | | |
| | 10 | Teotihuacán | ı disco | | | | | |
| | B | Kaminaljuyu | 5 tubos, 1 orejera, 1 masa | | | | | |
| | 12 | Nebaj | i disco.) cuenta | | | | | |
| Posclásico | 13 | Guajilar | t5 piezas de joyería | | | | | |
| | 14 | Touiná | 3 aretes | | | | | |
| | 15 | Municipio de Las Margaritas | 12 piezas de joyería | | | | | |
| | 16 | Chiapa de Corzo | 1 arcte | | | | | |
| | 17 | Municipio Simojovel | 3 discos | | | | | |
| | 18 | Chichén Itzá | diversos artefactos | | | | | |
| | 19 | Monte Albán | 34 piezas de joyería | | | | | |
| | 20 | Chinantla | diversos artefactos | | | | | |
| | 21 | Istmo de Tehnantepec | diversos artefactos | | | | | |
| | 22 | Tlatelolco | 1 cabeza de pato | | | | | |

表 2 先スペイン期琥珀製遺物出土地リスト (Lee Whiting 2004: 25より転載)

置が世界的に認知されたのは、1983年のブライアントの報告による(Bryant 1983)。それまで、先スペイン期の琥珀遺物はシモホベル産琥珀を材料とし、シナカンタン人により流通したと考えられていた(Navarrete y Lee 1978)。後に、同州ラス・マルガリータス遺跡出土の琥珀遺物について PIXE 及び蛍光 X線分析が行われ、一部がトトラパ産である可能性が示された(Lowe y Ruvalcaba 2000)。

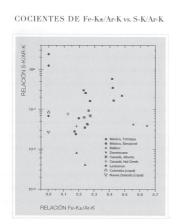
第二章 メキシコ史における琥珀利用

2.1. 先スペイン期

メソアメリカ研究において、先スペイン期研究は考古学調査が主たる研究方法である。メソアメリカにおける最も古い琥珀利用として、ラ・ベンタ遺跡において琥珀製のペンダントが報告され(Drucker 1952)、紀元前700年から600年ごろのものと考えられている(Drucker, Heizer y Squier 1959)。古典期からはメキシコ中央高原のテオティワカン遺跡などでも琥珀製と考えられる装飾用の

ディスクが出土している¹⁰⁾。後古典期からはメキシコ中央高原のトラテロルコ遺跡やテンプロ・マヨール遺跡、オアハカ地方のモンテ・アルバン遺跡などでも琥珀製品が発見されている。チアパス州内では先古典期から、チアパ・デ・コルソなどグリハルバ川流域の遺跡を中心に琥珀製装飾品が使われていたことが、考古学調査よりわかっている。

ロウェとルバルカバ (2000) により、同州のラス・マルガリータス遺跡出土の琥珀遺物について蛍光 X 線分析が行われ、いくつかがトトラパ産である可能性が示された。同分析では Fe-K/Ar-K と S-K/Ar-K の指数が比較対象とされ、トトラパ産琥珀の Fe-K/Ar-K の指数がシモホベル産琥珀の10倍を示していることから、分析対象であるラス・マルガリータス出土の遺物試料を、特にFe-K/Ar-K に注目して、トトラパ産と推定していることがわかる(図 2)。一般に土壌成分に由来する自然界の赤色の発色成分は鉄である。赤みを帯びた琥珀が重要視されていた歴史背景を鑑みると、出土遺物もまた赤色を帯びた琥珀である可能性が高い。遺物の鉄指数は、トトラパ産原石サンプルの指数分布内でみるとかなり低量域、あるいはトトラパ産より低い分布域に位置している。シモホベル産原石サンプルは赤みを帯びた黄色から明るい黄色とされているが、より赤みの強いシモホベル産琥珀を分析にかけた場合に遺物と同域の鉄指



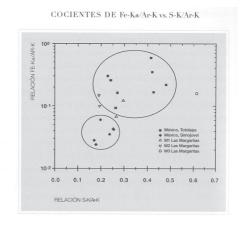


図2 PIXE・蛍光 X 線分析 (Lowe v Ruvalcaba Sil 2004: 132より転載)

数を示す可能性は大いにある。

他にも、ランベルトら(Lambert et al. 2004)は C_{13} -NMR $^{(1)}$ スペクトル分析を行っている(図 3)。 しかしながら、シモホベル産琥珀のスペクトルは サンプルによりバリエーションが現れたことや、トトラパ産琥珀と酷似したスペクトルを示すもの があり、両者の差異が明確には現れなかった。

琥珀遺物を型式分類すると、耳飾り、鼻飾り、唇飾り、ペンダント、ディスクなど、形は様々であれ、装飾品利用が主である。限定された原石産地と遺物の広大な出土範囲から、交易品としても機能したことは想像に難くない。さらに植民地期の記録を見ると、多様な利用法が先スペイン期から存在したことがわかる。

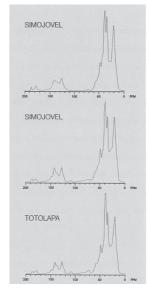


図3 NMR スペクトル分析 (Lambert et al. 2004より転載)

2.2. 植民地期

植民地期初期には、多くのスペイン人により新大陸の民族誌・博物誌が記述されている。1550年代以降に執筆されたサアグンによる『ヌエバ・エスパーニャ綜覧』(以下『総覧』)は先住民をインフォーマントとし、当初ナワトル語で記述された同記録は、最も信頼し得る史料の一つである。

同書第11巻第8章は、ヌエバ・エスパーニャにおける種々の貴石について 記述された博物誌である。その第3項に琥珀が紹介されている。

「この地の琥珀はアポソナリと呼ばれ、[…] 水の泡に似ている。明け方の太陽がその石に当たると、金のような明るい黄色に見える。これらの石は抗夫たちにより、山中で採掘されている。この石には3種類ある;一つ目は黄色琥珀と呼ばれている;これらは内部に炎のきらめきを持ち、とても美しい;二つ目は(ケ)ツァルアポソナリと呼ばれ、黄色に明るい緑色の混彩があることからそう呼ばれているという;三つ目はイスタクアポソナリ

と呼ばれ、白みがかった黄色で、透明でなく高価でもないためそう呼ばれているという。」(Garibay 1977: III: 335)

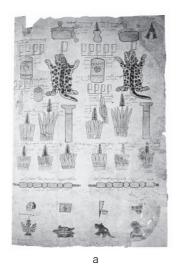
メシカにおいて琥珀は黄色い石と認識されており、同じ黄色のなかでも3種類の小分類があったことがわかる。「赤色の琥珀」という明言は見受けられないものの、「その内部に炎のきらめきを持ち」という部分は、内に赤みを含んだ琥珀に最も価値が見出されていたと読み取れる。また、現在では希少性が認められている乳白色の琥珀がもっとも価値が低かった。

『総覧』第9巻、第5章には「ナワロストメカと呼ばれるこの商人たちは (シナカトランの地で) 琥珀製の高価な唇飾りやテンコリと呼ばれる別の唇飾りと交換した。この唇飾りは、死や戦いを怖れず、格闘技や捕縛術に優れた勇敢な男がその勇気を示すために用いた。」(Garibay 1977: III: 31) と記されている。また第8巻、第21章の最後は「[…] そして、アトリスコやウエホツィンコから2人の捕虜を捕らえた者は、その冷徹さと勇猛さから、黄色琥珀と緑色貴石の顎飾りを与えられ、その両方を身につけていた。」(Garibay 1977: II: 332) と締めくくられている。これらの記述から、琥珀はメシカ人自身によりシナカトランの地から運ばれていた交易品であり、また勇猛さを称え戦士に下賜され身に着ける、勇敢さの象徴であったことも読み取れる。

第9巻第17章には「彼らが言うには、これらの神々¹²⁾は、彼らに黒色貴石や水晶、琥珀製の顎飾りや耳飾り、または他の(石でできた)白い耳飾りを作る石工としての役目を与えたという […]」(Garibay 1977: III: 59) とある。この記述から、琥珀を加工することもまた、神々から与えられた使命であったとメシカの工匠たちが考えていたことがわかる。

『メンドーサ絵文書』の献納簿には、ソコヌスコの地からの献納品として毎年「2つのレンガサイズの透明琥珀石塊」が記録されている。「金の台座を持つ琥珀製唇飾り」も描かれており、琥珀は納税品としての機能も持っていた(図4)。

さらに1522年、ナワ人医師マルティン・デ・ラ・クルスにより記された『インディオの薬草書』のラテン語翻訳書『バディアーノ写本』(Cruz 1991: I: 41)



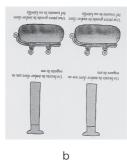


図4 メンドーサ絵文書 (a, b ともに Navarrete y Lee W. 2004より転載)

には以下の記述がある。

「ノノチトン・アスカパン・イシュア 心臓の痛みに

心臓に痛みや熱を感じている人は、次の処方の水薬を飲む:アリの巣の近くに生えるノノチトン・アスカパン・イシュアの薬草と、金、琥珀、テオチシウィトル、チチルティク・タパチトリ (の薬草)、テトラウィトル (の石)と焼いた鹿の心臓。すべてを燃やし、すり潰し、水を加える。」(図5)



図5 『バディアーノ写本』 "Electrum (琥珀)"の文字が読める (Cruz 1991: II: F28r より転載丸印は筆者)

『バディアーノ写本』の内容は、西洋と先住民

医療の混合であるとの指摘もある。事実、西洋医療史においては琥珀が心臓の病に効果があると考えられたこともあるため、この記述が先住民医療に基づく

か否か、更なる検証が必要である。

2.3. 植民地期以降

植民地期以降、琥珀がチアパス州にとっての輸出品になったのは、疑う余地がない。しかしながら、メキシコ国内の他の鉱山都市のように、スペイン人による大規模な採掘が行われるようなことはなかった。チアパス州では植民地期以降、現代まで、手作業での採掘が行われている。特にトトラパでは、現代に至るまで琥珀採掘は小規模で、サン・クリストバルへの輸出ですら、ごく限られている。またシモホベルにおける主たる輸出品はコーヒーであった。そのほかに、サトウキビ、タバコ、豆類、木材などが輸出品に数えられたが、輸出のための琥珀採掘が始まったのは、1900年前後といわれている(Ytuarte-Núñez 2014)。

植民地期以降から1970年代までの民族誌のなかで、琥珀に関する記述はごくわずかである。ブロムの手記によれば、1922年にシモホベルを訪れた際に、土地の石工たちは琥珀で小さな十字架や、マニータと呼ばれる手の形の細工、雫型や他の形の細工を作っていた。それらは地域内で「邪視」から子どもを守るためのお守りとして使われていた(Blom 1990)。20世紀初頭までには、輸出品と護符としての利用法がシモホベルで存在していたと考えられる。

第三章 現代の琥珀文化

1980~90年代にかけて琥珀採掘が盛んになると、シモホベル、トトラパ両産地において、多くの人々が琥珀と関わる生業を持つようになった。本章では、琥珀の民俗利用、現代の採掘、流通について、筆者による現地調査を基に紹介する。琥珀の呪医的利用は現在も行われているが、その性質には異なる点が見られる。

3.1. 民俗利用

護符

現在の琥珀の呪医的利用の一つとして、護符が挙げられる。シモホベルで

は、琥珀は「邪視"mal de ojo"」を防ぐための護符として用いられ、女性や子どもに身に着けさせる。メキシコにおける「邪視」は、他人の羨望や「強い視線」により、体内の血が「熱」を持つことにより、熱が出たり、理由もなく泣き続けたり、下痢や嘔吐、場合によっては死に至るとも言われている民間信仰上の病である。羨望を受けやすい女性や妊婦、身体がまだ整っていない子どもに起こりやすいと考えられ、特に女性や子どもが琥珀を身につける。

この呪医的利用には、二つの文化の融合が見られる。まず「熱冷二元論」である。新大陸に存在した病因論で、万物は熱または冷の性質をもち、身体は熱と冷の均衡が崩れることで病気になると考えられている。一方「邪視」は、旧大陸から持ち込まれた概念といえる。チアパス州で信じられている先述の「邪視」は、イベリア半島、地中海沿岸で信じられている「邪視」と酷似している。イベリア半島において邪視に対する護符として用いられるものは黒玉で作られた手を模したもので、「フィガ"figa"」などと呼ばれている(図 6)。スペインで黒玉は、16世紀以後、玉やペンダント製作に用いられ、ロザリオなど魔術的あるいは宗教的要素をもつものの材料として人気があった(Lambert et

al. 1994: 58)。一方のチアパス州では邪視に対する護符として琥珀が用いられるが、最も一般的なものは「マニータ"manita"」と呼ばれる手の形の護符という点で共通しており、ロウェ(Lowe 2004: 135)やオルベラ(Olvera H. 1992)はこのフィガとマニータの関連性を指摘している。手の形に違いはあるが、両者の関係は疑う余地がある(図7)。またフィガはフランシスコ会士がよく用いるが、シモホベル周辺もまたフランシスコ会士により布教が行われた地域である。メキシコシティのテンプロ・マヨール遺跡の16世紀の地層やチアパス州のフランシスコ会の教会址から、フィガが発見されている。このような点からイベリア半島に存在していた概念とチアパス州の慣習



図6 フィガ
(Olvera H. 1992より転載)

との関連については調査・考察の必要がある。両 者の関連性を仮定するならば、黒玉から琥珀に材 質が変化した過程や、異なる手の形の理由などを 明らかにすることが課題といえる。

薬

現代でも琥珀は薬として用いられている。しかし、植民地期初期の記述にみられるような薬草との併用ではなく、琥珀単独で利用する。効用も異なっている。

現代の琥珀の医術利用で最も一般的な方法が、 小片を燃やし、煙をあびることである。シモホベ



図7 子供用ブレスレット、 右下がマニータ (檜垣芽依撮影)

ルでは、琥珀の煙が目の中の異物を取り除く、目のかゆみを取る、鼻の通りを 良くする、歯やのどの痛みを和らげるなどと言われている。当人たちはあくま でも民間信仰の一つと語りながら、実際に行っている。

琥珀のおしゃぶりもよく使われている¹³⁾。赤ん坊は歯が生えかけてくると、口に熱を持ちむずがゆさを感じる。そのためおしゃぶりをかじるが、それが琥珀製だと解熱作用があるため、より有効であるとシモホベルの人は語る(図7右中央)。琥珀は子どもを守るためにしばしば使われている。これらの他にも、赤ん坊や幼い子どもが理由もなくぐずって止まないときに、腕に抱いて琥珀の煙の上で揺らしていると泣き止むと語る。

儀礼

儀礼においても琥珀は用いられていた。祭りなどで、教会や祭壇を浄化する目的で琥珀を燃やしていたと語る。しかし近年は琥珀が焚かれなくなった。筆者の調査中に聖人の祭りがあり、ミサの前から教会には香炉がおかれた。空間の浄化のため煙が焚かれたが、琥珀ではなくコパルであった。現在でも琥珀を用いるとされる儀礼は、坑道の開山儀礼である。以下は、シモホベルに伝わる伝承である。

「坑夫は夢の中で琥珀のある場所を見つける。夢の中で何者かが特定の場

所へ導こうとする。その導きが途絶えた場所が、『琥珀が出るよい場所』である。夢で示された場所、その琥珀が見つかる場所に週に 2 回は訪れ、そこでろうそくを灯す必要がある。ろうそくの数は坑夫の心計りにより、 $1\sim3$ ダースほどである。作業場の角に、四角くろうそくを並べ、神に労働の祝福と、自らの主人になってくれることを祈る。」(Balcazar Díaz 2009)

開山儀礼では、ろうそくとともに香炉台を置き(図8)、琥珀の小片とコパルを焚くと坑夫は語る。また伝承では、坑夫たちは「山の主」の存在がその場所の「所有者」であると信じている。山の主は、ろうそくを灯しているときに

現れる。坑夫たちに、祭壇など主の望みを語る。Pauchil の山では、祭壇が捧げられている。

しかしながら、このような民俗利用は シモホベルとその周辺村でのみ行われて おり、トトラパでは確認されなかった。 実際にトトラパで何らかの民俗利用の事 例がないか尋ねると、広場でも坑夫から も「そういう迷信をシモホベルやサン・ クリストバルで聞いたことはあるけれ



図8 香炉 (シモホベル・デ・アジェンデ共同体琥珀 博物館にて筆者撮影)

ど、このあたりでは無い」という語りを得た。シモホベルに限定された民俗利 用の起源については、今後の課題といえる。

3.2. 採掘

シモホベルでは、その周辺村も含めて現在約30の坑道が稼動している(表3) 多くの坑夫は、土地の所有者に坑道の賃貸料を払い採掘作業を行っている。 賃貸料は月毎の先払いで、採掘した琥珀はすべて採掘者のものとなる。各坑道 はアリの巣状に複数の小坑道があり、その一つ一つに採掘者が割り当てられ る。一つの小坑道あたり1~3人の坑夫が作業する(図9)。それぞれが賃貸 者の場合には、作業を分担し採掘した琥珀原石を均等に分配するか、時間を分

| 1 | | A Ceiba | 12 | ~ | Huitiupán | 22 | ▼ | Pimienta | |
|----|---|-----------------------|-----------------------------|---|----------------------|------------------|----------------------------|--------------------------|--|
| 2 | | Benito Juárez | 13 | | Jardín | 23 | ~ | Portugal | |
| 3 | | Cárdenas | 14 | | Jotolchén | 24 | | Ramos | |
| 4 | | Chanalcum | 15 | ~ | Los Cocos-El Pauchil | 25 | | Río Blanco | |
| 5 | | Chapayal | 16 | | Luis Espinosa | 26 | | Rivera Domínguez | |
| 6 | | Duraznal | 17 | | Maravillas | 27 | | San Antonio Río Cacateal | |
| 7 | ~ | El Carmito-Mazantic | 18 | ~ | Monte Cristo | 28 | | San José | |
| 8 | ~ | El Pocitos | 19 | ~ | Nueva Generación | 29 | | San Rafael-Roblar | |
| 9 | | Guadalupe Victoria 1 | 20 | | Palo Blanco | 30 | | Sitalá | |
| 10 | | Guadalupe Victoria 2 | 21 | | Pechua | ✔ =Visitado(訪問済) | | | |
| 11 | | Guadalupe Victoria 3◆ | ◆=Abierto en 2016 (2016年開山) | | | V = | ▼=Cerrado (2016年 3 月までに閉山) | | |

表3 シモホベル周辺の坑道リスト

(筆者作成)

けて作業する。また賃貸者自身が作業員を雇い、給与もしくは採掘した琥珀の 一部を支払う場合もある。ウィティウパンでは露天掘り方式の採掘跡も確認で きた。

採掘にはつるはし、シャベル、ハンマー、ノミなどを用いる。坑道内での明かりは、ヘッドライトまたは手持ちの懐中電灯である。坑道内に天然ガスが発生している場合もあり、また酸素不足も起こりうるため、ろうそくなどは用いられない。坑夫たちは坑道の壁面を観察し、石炭層からの距離、貝やサンゴなどの化石の有無、黒玉岩脈の有無などから当たりをつけ掘り進める。わずかでも琥珀が見つかると、土中の琥珀が壊れないよう細心の注意を払いながら、周囲の壁を掘削する。琥珀はもろく壊れやすいため、作業による振動で圧力がか



図 9 シモホベル 左:入り口 [Mina de Nueva Generación], 中央:坑道内 [Pocito], 右:鉱山 内作業 [Monte Cristo], (すべて筆者撮影)

かるだけでも壊れたりひびが入ったりすることが ある。坑夫たちは様々なサイズのハンマー・ノミ を使い分け、慎重に採掘する。掘削時の土塊はそ の場で再度割られ、内部に琥珀の小片がないか確 認し、手押し車で坑道の外に運ばれる。外では別 の賃貸者が、再度土塊を割り琥珀を探す。坑道内 は暗いため取りこぼしが有るためである。外の賃 貸料は内部作業者の半額程度であり、また力仕事 でもないため女性や子どもが作業していることが 多い(図10)。



図10 坑道外で琥珀を探す 子ども(筆者撮影)

坑道内では写真撮影、火気使用、薬物利用が禁忌となっている。盗掘目的の 部外者の侵入、天然ガスの引火による崩壊、薬物によるトラブルや採掘者間の 争いを防止する目的がある。同じ理由でアルコールを禁止している坑道も有 る。

トトラパでは主に土地の所有者とその血縁者が採掘しているため、「○○氏の坑道」と呼ばれる。

筆者はサラド川のM氏の坑道とパチェン川のJ氏の坑道を調査した(図11)。

M氏の坑道では、M氏1人で採掘している。M氏はもともとトウモロコシ栽培を生業とし、時間のあるとき友人の坑道を手伝ったり、川で琥珀を拾ったりしていたが、畑を開墾中に琥珀岩脈を見つけ、採掘を生業とするようになった。35年間同じ場所を掘り続け、崖を掘削した巨大な坑道である。高さが8.3mあり十分に光が入るため明かりは用いず、道具はシャベル、ノミ、ハンマーだけである。

J氏の坑道では2016年3月現在分かれ道のない4つのトンネルが掘られていた。すでに2つのトンネルで採掘を終え埋め戻されているのが確認でき、さらに1つトンネルを開けているところだった。各トンネルは入り口付近が幅1.5~2.1m、高さ1.5~1.9mで、奥行きは4.5~8.1mと琥珀の分布により異なる。一度琥珀岩脈が見つかると、幅1.7~2.4m、高さ1.7~2m程度の作業スペースに広げられ、各トンネル当たり2~3名が作業する。採掘方法はシモホベルと

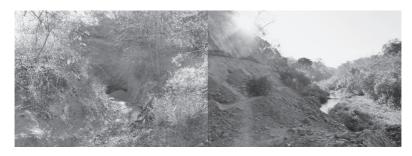


図11 左:M氏の坑道,右:J氏の坑道(筆者撮影)

ほぼ同様であるが、つるはしは開山のためだけにつかい、坑道内部には持ち込まれない。トトラパの琥珀はシモホベルのものよりもろく壊れやすいため、ノミやハンマーも小ぶりなものが使われている。J氏は、筆者が調査協力を受けた採掘者たちの中で唯一ブラックライトを所有していた。10人程度が複数のトンネルに分かれて作業し、J氏が全体を統括している。琥珀自体は分配せず、すべてがJ氏のものとなる。J氏自身が琥珀を販売し、その利益を作業員に現金で分配している。トトラパでは個人または信頼できる者同士でのみ採掘作業を行うため、禁忌事項は定められていない。

またトトラパには、琥珀の盗掘を専門とする者も居る。C氏は現在トトラパで採掘が行われているすべての坑道を把握している。自分では坑道を掘削せず、各日晩に3人ほどで坑道に向かい、日中の作業で軟らかくなった壁面をナタで削り、露出した琥珀原石をナタで採集する。採集した琥珀は仲間内で話し合い分配する。

3.3. 流通

シモホベルでは、琥珀は主に中央広場で取引される。広場には、毎日朝7時ころから日が沈むまで仲買人が何人も待機しており、坑夫たちは自ら球体に磨いた琥珀を持ち寄る。未研磨の琥珀原石を持ち寄る場合もあるが、価格は研磨済みの琥珀に対して半額以下となる。平日はシモホベル・デ・アジェンデ内の坑夫たちが持ち寄ることが多いが、週末には周辺村の坑道からも琥珀が持ち込まれる。琥珀はその大きさ、色、質により区分され、グラム単位で取引される。

大きさは、直径 $5\sim7$ mm、 $8\sim11$ mm、12 mm 以上に区分される。 $5\sim7$ mm と $8\sim11$ mm では、倍以上に価格の差が有る。また、5 mm 以下の小さい琥珀は取引の対象にならないか、交渉の上で一袋あたりの価格で取引される。

色は青、緑、赤、黄色に分けられる。青や緑色の琥珀はほとんど産出しないため、価格は坑夫と仲買人の間でその都度交渉となる。赤色琥珀は黄色琥珀よりも価値があるとされているが、質の良いものが少ない点や、現地で大量購入していく中国人たちが黄色を好むことから、価格に大きな差はない。取引される琥珀の大部分は黄色琥珀であり、その価格は質により異なる。

琥珀の質は、内含する亀裂、曇り、含有物で決まる。亀裂の多いものは取引の対象とならない。亀裂、曇り、含有物のない透明な琥珀は一級品とされ8~11mmのものがおよそ40ペソ/g、亀裂、含有物がないがやや曇りのあるものは二級品とされ約10ペソ/g、少しだけ亀裂があるもの、含有物や曇りのあるものは三級品とされ約7ペソ/gで取引されていた(2015年)14)。

質の査定ではまず仲買人が、持ち寄られた琥珀を1つ1つノギスで測り、大きさで分類する。次に再び1つ1つ白色ライトで亀裂と含有物の有無を確認し、分類する。その後ブラックライトで曇りの有無を確認し、分類を完了する。分類した琥珀をはかりに載せて重さを量り、合計金額を伝える。坑夫と仲買人の間で金額に合意が得られれば交渉成立となる。すべての仲買人はノギス、二種類のライト、はかりを持ち歩いている(図12)。

仲買人は、琥珀が一定量たまると手工芸品工房の職人に売る。仲買人から職

人への販売価格は、坑夫と仲買人の取引価格の約2倍だが、一度に大量に仕入れるために仲買人を介す。職人たちは自然光で見えない程度の曇りはあまり気にしないが、亀裂と含有物を見極めるため、白色ライトで一点一点を査定し直す。穿孔作業やデザイン加工をする際、ひびや含有物が作業に影響するためである。

それでもなお仲買人が曇りの有無を精査する理由は、国外の客のためである。現在カナダ



図12 琥珀の仲買(筆者撮影)

人、アメリカ人、中国人などが琥珀を求めにシモホベルを訪れる。特に中国では2000年以降のジュエリー界の急成長や、2014年頃からの宝石投資ブームから、琥珀需要が上昇している。近隣ミャンマーの琥珀産地が中国人による大量買付けにより一時的に採掘制限がしかれたことや、ミャンマー産琥珀の偽物が大量に出回っていることから、2012年頃より定期的に買い付けに来ている。琥珀を投資対象と考えると、曇りも含めた品質が重要視されるのは当然といえる。

シモホベルの街に観光客は少ない。観光客への売買は、主にサン・クリストバルで行われている。シモホベルの職人はサン・クリストバルに自らの製作物を売りに行くか、研磨琥珀や商品を同市の宝飾品店に卸して生計を立てている。サン・クリストバルでは琥珀のイミテーションも多数出回っており、シモホベルからの直接の販売は、品質の信頼度を示すのに一役買っているといえる。

一方のトトラパでは、鉱山所有者自身が原石のまま琥珀を販売することが多い。村の中に琥珀工房はほとんどない。サン・クリストバルの仲買人や宝飾品店の者がトトラパを訪れ、あるいは反対に採掘者がサン・クリストバルの彼らを訪れ、原石を販売する。2016年の調査では、トトラパでは一級品・二級品が確認できなかった。三級品の価格は5ペソ/g、三級品以下の大振りなもので $2\sim2.5$ ペソ、含有物の多いものや小さすぎるものは1ペソ/g以下であった(例:500ペソ/800g)。

トトラパの調査では、琥珀の流通事情に関して、産地の知名度による問題点が明らかになった。"Expo Ámbar"は年に一度サン・クリストバルで開かれる琥珀展示・販売の大イベントである。このためにシモホベルやトトラパには、サン・クリストバルや州都トゥクストラ・グティエレスから、職人や宝石店の者が琥珀を買い付けに来る。しかし実際の販売会場では、産地問わず「シモホベル産」として販売されることがある。先述の通りシモホベルから仕入れたものは品質の信頼度につながり、言わば「シモホベル」はブランド化している。そのためトトラパ産であっても「シモホベル産」として販売される。これはトトラパ産琥珀が、例え赤色琥珀であっても、シモホベルの黄色琥珀より安価に取引される一因になっている。

第四章 まとめと課題:解決案の提示

以上のことからメキシコにおける琥珀の利用法は、歴史的にみると、装飾品、埋葬品(先スペイン期)、交易品、戦士の象徴、下賜品、納税品、薬(植民地期)、輸出品、護符(植民地期~)、香(現代)と多岐に渡っている。薬、護符としての利用は、遅くとも植民地期初期からと考えられるが、西洋医術理論との関連や、植民地期から現代までの連続性には、更なる考察が必要である。香としての利用については、その始まりが明らかになっていない。先スペイン期から利用されてきた同じく樹脂起源のコパル製の香とあわせて研究を重ね、比較・検討を行う必要がある。

時代ごとの通史編纂からは、以下の課題が挙げられる。

先スペイン期の琥珀利用に関しては、考古学的検証が主たる研究方法となる。しかしながら、考古学者としての視点から見て、実際の発掘において琥珀製品を見つけることは難しい。一つの原因が、考古学者が琥珀と推測しないことや、何らかの別の物質と混同してしまうことである。考古学は文化的コンテクストを重要視する。そのため、琥珀産地との関係が見られなければ、琥珀の出土は考古学者の想定に現れない。しかしながら、先スペイン期の流通網は、おそらく現在わかっている以上に複雑で、産地の遠方であっても琥珀片が出土する可能性は大いにある。琥珀小片は意識して探さなければ発見は不可能である。この問題の解決法の一つとしては、発掘時に採集される土のサンプルの洗い出しがある。土中の種子など微小な遺物を見つけるために行われるこの「洗い」作業に、ブラックライトによる照射を合わせることで、琥珀の有無の確認が可能である。筆者は将来の研究計画として、アリゾナ州立大学テオティワカン考古学研究センターに保管されている土サンプルへのブラックライト照射を計画している。これは少なくとも、テオティワカンに琥珀原石が流入していたかどうかを明らかにするためのデータが提示できるだろう。

風化の早い琥珀の保存方法も課題である。琥珀は有機原石であるため、風化が早い。特に影響を与えるのが、急激な湿度変化と酸化である。琥珀は自然状態で微細な亀裂を持っている。亀裂より内部に浸透した水分がある場合、湿度変化により微細亀裂から破損することがある。また、酸化により暗色の皮膜が

できる(Grimaldi 1996: 13)。そのため、無酸素状態で保存することや、適切な強化処理、接合剤による修復が必要である(Thickett, Cruickshank y Ward 1995: 225)。たとえば降旗と佐藤(2010)などが提示するわが国の琥珀保存処理は同様の風化要因に対するものであり、これらの保存技術の検証と適応が期待される。

琥珀の考古理化学分析については、琥珀の産地同定のための化学分析手法が いまだ確立していない問題がある。本文で述べたランベルトら(Lanbert et al. 2004) の C₁₃-NMR スペクトルによる分析は詳細な産地同定の有効な手段とは なりえなかった。ロウェとルバルカバ(2000)の蛍光X線分析も、分析方法や サンプルの選定に疑問が残っている。降旗と佐藤(2010)などにより、わが国 で研究されている顕微赤外分光法(FT-IR)や、熱分解ガスクロマトグラフ/質 量分析法(Py-GC/MS)などは、産地同定のための有効性が示唆されている。 しかしながら、久慈産/銚子産など、距離の離れた産地の同定については成果 が上がっているが、メキシコのケースのように、距離の近い産地間でどれだけ の差異が観察できるかは疑問が残る。とはいえ、複数の分析を組み合わせるこ とにより産地同定は可能かもしれない。しかしそのためのデータベースが不足 している。ランベルトらは、シモホベルから10点、トトラパから2点のサン プルを、ロウェとルバルカバは2箇所のシモホベル坑道と4箇所のトトラパ坑 道からサンプルを採取し分析を行った。先に述べたとおりシモホベルの坑道は 現行のもので30箇所前後、トトラパではリー・ホワイティングのリストによ れば、2004年には少なくとも19箇所はあった(Lee Whiting 2004: 107)。総数 に比べ、明らかに試料数が不足している。筆者は2015~2016年の調査で、シ モホベルで 7 箇所、トトラパで 2 箇所のサンプリングを終えた。また、シモホ ベルの坑道所有者とコミュニケーションをとり、次回調査で新たに4箇所サン プリングをする手はずが整っている。考古理化学分析の要であるデータベース の充実が何よりも求められており、また坑道単位である程度の産地同定ができ るならば、そこから先スペイン期の採掘址の発見・調査など、未来の研究につ ながり、考古学界にとって大きな貢献となる。

植民地期以降現代までの研究には、二つの課題が残る。一つは史料批判であ

る。バディアーノ写本など、その内容や西洋文化の影響について議論が続けられている史料がある。これらの史料は先住民文化との照合からその正当性が主張されてきたが、スペイン側の当時の情勢を踏まえた史料批判が必要である。また民族誌については史料批判がほとんど行われていない。本論で17世紀から19世紀までの史料を引用していないのも、その史料の信憑性に疑問が残っていたためである。史料の内容が十分に議論され信頼されれば、もう一つの課題である植民地期以降の西洋文化の影響について研究するための有効な史料になりうる。先に述べたフィガとマニータの関係性や、各種民俗利用における先住民/西洋文化の相互の影響、キリスト教(特にフランシスコ会)との関連などが今後の研究課題といえる。

現代の琥珀利用に関しては、2つの社会的問題がある。一つは子どもの労働である。筆者が産地を調査した地域だけでも、10数名の10歳前後の子どもが採掘作業に従事していた。彼らは学校には行かせてもらえず毎日坑道で働いている。筆者をウィティウパンに案内してくれた I 氏(30歳)は、現在は琥珀の仲買人をしているが、9歳から17歳までウィティウパンでの露天掘り採掘に父親と従事し、小学校低学年以降はほとんど学校にいくことができなかったと語っていた。もう一つの問題が、本論でも触れた産地の知名度による格差である。トトラパの坑夫たちからは、「自分たちが掘った琥珀はシモホベル産よりも安く買い取られ、しかも『シモホベル産』として売られる。安く買い取られるから、研磨機を買うお金は作れず、やむを得ず原石のまま売るか、できても紙やすりで磨くくらいである。球体に研磨されていないとやはり安く買い取られるから、いつまでも同じことの繰り返しである」という語りが得られた。これら二つの社会的問題は、産地の人々の生活の改善、そして次代を担う子どもたちの成長のためにも、早急に解決すべき課題といえるだろう。

本論の目的は、琥珀利用の物質文化史をまとめる中から、我々が研究者として、あるいは一つの社会の構成員として向き合うべき問題を取り上げることであった。いくつかの課題については、解決のために必要な研究方針の一例を提示した。しかしながら、「琥珀」はいまだ研究者の少ないテーマであり、課題解決に向けての足並みは遅い。先述の通り直近10年だけでも急成長する科学

技術や分析方法が有効に適応できる可能性も含め、先進的で継続的な研究が求められている。

注

- 1)「竜涎香」を意味する "anbar" を語源とする説もある。
- 2) 筆者訳。以下すべての引用も同様。
- 3) イスタパーソヤロ地域は、現在では採掘が行われていない (Ytuarte-Núñez 2014)。
- 4) municipio。メキシコにおける行政区分。
- 5) 2010年の情報 (Secretaria de Desarrollo Social 2015)。
- 6)以下、琥珀産地を示す場合には「シモホベル」、ムニシピオを示す場合は「シモホベル・デ・アジェンデ」と記す。
- 7) ウィティウパン、タピルラ、ソリスタワカン、ドゥラスナル、パンテルオー、エル・ボスケなどのムニシピオ。
- 8) 2010年の情報 (Secretaria de Desarrollo Social 2015)。
- 9) バスケス・デ・エスピノサは琥珀の産地としてタパラパ (Tapalapa) を紹介しているが、実在のタパラパ村周辺には琥珀産地がないことから、トトラパ村の誤りであろうと考えられている (Lee Whiting 2004)。
- 10) リー・ホワイティング (2004: 31) は、1939年にアルフォンソ・カソとホセ・レジェスによる発掘から出土し「黄色い顔料(?)製のディスク」と報告されたもの (de la Borbolla 1947: 67, fig. 10)が琥珀製で有る可能性を述べている。他にも Rattray (1992: 43 fig. 18: 52) が同地で琥珀を発見している。また近年のセルヒオ・ゴメスによる羽毛の蛇神殿の発掘でも、琥珀製品が報告されている (Shaer 2016)。
- 11) 核磁気共鳴分光法(Nuclear Magnetic Resonance Spectroscopy)。
- 12) チコナウィーイツクィントリ、ナワルピリ、マクィルカリ、シンテオトルの4神。
- 13) ブレスレットやネックレスとして身につけさせ、乳児が自分で齧る。
- 14) 2016年の調査では8-11mmの一級品で25~30ペソ/g、二級品が10~15ペソ/g、三級品が7ペソ/gと価格は常に変動している。また11mm以上の一級品がほとんど出回らない時期もあり、そのときは1グラムあたり100ペソ以上で取引されているのも確認できた。また、虫入り琥珀などは高価で取引され、料金体系はない。

参考文献

Ara, fray Domingo de (1986) *Vocabulario de lengua tzeldal según el orden de Copanabastla*, (M. Ruz, ed.) Centro de Estudios Mayas, UNAM, México D. F.

- Balcazar Díaz, Jorge (2009) *Museo comunitario del ámbar*, Folleto del Museo Comunitario del Ámbar en Simojovel de Allende, Simojovel de Allende
- Blom, Frans (1990) En el lugar de los grandes bosques (Epistolario 1919–1922 y diarios de dos expediciones), Gobierno del Estado de Chiapas-Consejo Estatal de Fomento a la Investigación y Difusión de la Cultura-DIF-Instituto Chiapaneco de Cultura, Tuxtla Gutiérrez
- Böse, Emilio (1905) "Reseña acerca de la geología de Chiapas y Tabasco", *Boletín del Instituto Geológico de México*, 20, Instituto Geológico, México D. F.
- Bryant, Douglas Donne (1983) "A Recently discovered amber source near Totolapa, Chiapas, Mexico", *American Antiquity*, vol. 48, num. 2, pp. 354–357, the Society for American Archaeology
- Cruz, Martín de la (1991) *Libellus de Medicinalibus Indorum Herbis*, I–II. Fondo de Cultura Económica e Instituto Mexicano del Seguro Social, México, D. F.
- De la Borbolla, Rubín (1947) "Teotihuacan: ofrendas de los Templos de Quetzalcoatl", *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia*, Tomo 2, 1941–1946, pp. 61–72, Secretaría de Educación Pública, México D. F.
- De la Peña, Moisés (1951) *Chiapas Económico*, tomo IV, Departamento de Prensa y Turismo, Sección Autográfica, Tuxtla Gutiérrez
- Drucker, Philip (1952) La Venta, Tabasco. A study of Olmec ceramics and art, Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 153, Washington
- Drucker, Philip, Robert F. Heizer and Robert J. Squier (1959) *Excavations at La Venta, Tabasco,* 1955, Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 170, Washington
- Garibay K., Angel María (1977) *Historia General de las Cosas de Nueva España*, Tomo II–III. Editorial Porrúa, México D. F.
- Grimaldi, David A. (1996) Amber. Window to the past, Harry N. Abrams, Inc. Publishers & The American Museum of Natural History, New York
- Lanbert, Joseph B., E. Graham, M. T. Smith and J. S. Frye (1994) "Amber and jet from Tipu, Belize", *Ancient Mesoamerica*, vol. 5(1), pp. 55–60, Cambridge University Press
- Lanbert, Joseph B., James S. Frye, Thomas Arvol Lee Whiting, Christopher J Welch y George O. Poinar Jr. (2004) "Análisis del Ámbar Mexicano por Espectroscopía de carbono-13 RMN", Thomas Arvol Lee Whiting (coord.) *Ámbar de Chiapas: historia, ciencia y estética*, pp. 120–125, Gobierno del Estado de Chiapas, Tuxtla Gutiérrez
- Lee Whiting, Thomas Arvol (2004) "Introducción", Thomas Arvol Lee Whiting (coord.) Ámbar de Chiapas: historia, ciencia y estética, pp. 22–55, Gobierno del Estado de Chiapas, Tuxtla Gutiérrez

- Lee Whiting, Thomas Arvol (2004) "El ámber de Totolapa: una addenda", Thomas Arvol Lee Whiting (coord.) Ámbar de Chiapas: historia, ciencia y estética, pp. 120–125, Gobierno del Estado de Chiapas, Tuxtla Gutiérrez
- Lowe, Lynneth S. (2004) *El ámbar de Chiapas y su distribución en Mesoamerica*, Universidad Nacional Autónoma de México, México D. F.
- Lowe, Lynneth y José Luis Ruvalcaba Sil (2000) "Provenance Studies of Amber by PIXE", Antropología y Técnica, vol. 6, pp. 41–48, Nueva época, Instituto de Investigaciones Antropológicas, UNAM, México D. F.
- Navarrete, Carlos y Thomas A. Lee (1978) "The Prehispanic system of communications between Chiapas", *Boletín INAH*, num. 35, pp. 13–19, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México D. F.
- Olvera H., Jorge (1992) "Las figas compostelanas y la presencia de Santiago en América: la primera iglesia construida en México dedicada al apóstol y el primer convento franciscano asociado a ella", *Cuadernos de arquitectura virreinal 12*, Universidad Nacional Autónoma de México: Facultad de Arquitectura, México D. F.
- Rattray, Evelyn Childs (1992) *The Teotihuacan Burials and Offerings: A Commentary and Inventory*, Vanderbilt University, Nashville
- Secretaria de Desarrollo Social (2015) Informe Anual sobre la Situación de Pobreza y Rezago Social 2015
- Shaer, Matthew (2016) "A Secret Tunnel Found in Mexico May Finally Solve the Mysteries of Teotihuacán. The chance discovery beneath a nearly 2,000-year-old pyramid leads to the heart of a lost civilization", *Smithsonian Magazine*, June 2016. http://www.smithsonianmag.com/history/discovery-secret-tunnel-mexico-solve-mysteries-teotihuacan-180959070/?no-ist(最終 閲覧:2016/11/08)
- Thickett, David, Pippa Cruickshank and Clare Ward (1995) "The conservation of amber", *Studies in Conservation*, vol. 40(4), pp. 217–226
- Vázquez de Espinoza, Antonio (1948) Compendio y descripción de las Indias Occidentales, Smithsonian (1630) Miscellaneous Collections, vol. 108, Publication 3898, Washington
- Ytuarte-Núñez, Claudia (2014) Cultura y comunicación en el intercambio global de mercancías: el ámbar de Chiapas, México, Universidad Autónoma de Chiapas, Tuxtla Gutiérrez
- 白石太一郎編(2002)『日本の時代史 1:倭国誕生』吉川弘文館, pp. 118-120, 東京田村栄一郎(1999)『琥珀誌』くんのこほっぱ愛好会, 久慈
- 降幡順子, 佐藤昌憲 (2010)「キトラ古墳出土琥珀玉の保存処理」『奈良文化財研究紀要』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, pp. 22-23, 奈良

Historia Cultural del Ámbar en México:

Una Propuesta de Solusión a las Problemáticas de los Estudios Precedentes Descubiertos através de Análisis e Investigación Antropológica

Yuta CHIBA

El ámbar es una resina fosilizada, se utiliza como ornamento desde hace 20 mil años, por lo cual se le considera una de las primeras piedras preciosas en la historia de la humanidad. Se produce principalmente alrededor del mar Báltico, así como en República Dominicana, Japón, y México. La mayoría de los países que producen ámbar forman parte de la "Ruta del Ámbar del Viejo Mundo"; sin embargo, México no pertenece a esta ruta debido a su estancia geográfica. Por esta razón, México es un buen ejemplo para analizar la cultura del material del ámbar sin la influencia del Viejo Mundo, y asimismo, para estudiar los efectos de la cultura del Viejo Mundo en la época colonial de este país desde el punto de vista del uso del ámbar.

En este artículo se presenta el modo de utilización de esta piedra en México dentro de diferentes épocas, tales como la prehispánica, la colonial, la moderna y la contemporánea. Los datos fueron obtenidos de los estudios realizados en el campo de arqueología para la época prehispánica, de los manuscritos históricos y códices para la época colonial, de las etnografías para la época moderna y de la investigación antropológica por autor para la época contemporánea. Se llevó a cabo una investigación antropológica en abril del año 2015, así como en febrero y marzo del 2016 en los yacimientos de Simojovel y Totolapa en Chiapas. Dentro de los datos obtenidos, se muestra información del estudio como la observación de actividades en minería y mercancía así como entrevistas a mineros e intermediarios de ámbar.

El objetivo de este trabajo es presentar los problemas del estudio precedente y la situación de las actividades de la gente que trabaja con ámbar, redactando a su vez la historia de la cultura material del uso del ámbar en México. Hay muchos problemas que se deben solucionar sin demora, como lo es la conservación de los materiales arqueológicos, así como varios temas importantes a analizar en investigaciones futuras. Este artículo enumera algunas propuestas posibles para solucionar tanto los problemas como los temas sugeridos para distintos estudios, partiendo de la actualidad hacia el futuro. Así como mencionando métodos y tecnologías para algunos análisis arqueoquímicos recien realizados.